

## 準優秀賞

### 本当の助け合い

真鶴町立真鶴中学校三年

高橋 和花

私達はよく、「助け合い」という言葉を耳にする。実際私も、日常会話で口にすることがあるが、助け合いとは何か、ぼんやりとしてしまつて分からない。そこで、助け合いについて自分なりに考えてみたいと思う。

まず最初に思い浮かんだことは、授業での教え合いだ。隣の人だけでなく、悩んでいる人がいたらすぐに声をかけ、助ける姿。既に当たり前だと思つていた光景だが、改めて思うととても温かく、素敵なことだと感じる。しかし、教えている人はいつも同じ人だと思う。声をかけて助ける人、助けられる人の関係はほとんど固定されている。これでは、助けにはなっていないものの、助け合いにはなっていない。けれど、数字が分からない人に教えてあげること、その人もさらに学びが深まり、曖昧に覚えていたことがはつきりするというメリットがある。それが教えてられている人が相手を助けたという気もちにはならないが、教えている人は、助かったと思うこともあるかもしれない。

二つ目は、高齢者との助け合いだ。真鶴町は坂や階段が多く、そして重い荷物を歩くことは、高齢の方にとってはかなりつらいことだと思う。そんな時、一人の女性が声をかけ、荷物を持ってあげている所を見て、私は感心した。勇気のいることなのに、すぐ行動に移して、本当に良い人だ

と思った。それから私も、その女性のように通りすがりの人を気にかけ、助けてあげられるようになりたいと思った。荷物を持つことだけでなく電車の席をゆずることもできる。その場で私が席をゆずっても、その人から何か直接助けられることはない。しかし、私が席をゆずった後、何かほっこりするような、安心感と温かさを感じることは確かだ。そして一度席をゆずることができたら、その後自分の自信にもつながった。

三つ目は、目の不自由な人との助け合いだ。信号を渡る時、よく音が鳴るシステムに気付くことがある。これは目の不自由な人のために作られたものだが、実際、この音だけで横断歩道を渡ることができのだろうか。アメリカでは、目の不自由な人を見かけたら、腕を貸し、一緒に横断歩道を渡ってあげるといふ話を聞いたことがある。日本では、音が鳴るだけで、そのような光景をあまり見ない。日本は親切な国と言われているが、その点では、積極性が足りず、フレンドリーさが乏しいと感じた。助け合いと言われると、どうしても固く考えてしまうが、私もそのアメリカ人のように気さくに行動すべきだと思った。またこれも、目の不自由な人への一方的な手助けのように思うかもしれないが、目が不自由だからといって健常者を助けられない訳ではない。そして、その場の一対一での助け合いではないが、人を助けたことにより成長や心の変化を感じることができ。これは、助けた人にとって良い機会になるだろう。近年では、公共の場で誰もが安全に暮らせるよう、ユニバーサルデザインを取り入れたものが増えてきている。だけど、人がその場で助けてあげることが一番だと思った。

今回助け合いについて考えてみて分かったことは、助け合いとは、助けられたくとしている訳ではないということだ。勉強を教えてあげること、高齢者や目の不自由な人に手を貸すことも、その後の恩を期待していないはずだ。そして助けたことによつて自分が成長するという、直接的ではない助け合いこそ本当の助け合いだと感じた。だから、人を助けることは、めぐりめぐって自分に帰って来るということだ。私も誰かを気にかけて、すぐに行動に移せるようになりたい。しかし、過度に助けることは良くないので、助け合いという自然の関係は保っていききたいと思う。